慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	新實在論序説
Sub Title	
Author	島原, 逸三(Shimabara, Itsuzo)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1930
Jtitle	哲學 No.7 (1930. 12) ,p.1- 11
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000007-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

新實在論序說

島原逸三

はしがき

こゝに論述をはじめようとする哲學思想の一系統を新實在論と呼んだ。假の名稱である。何を論じ何を主張せんとするかはこの四つの文字だけから豫斷さるべきではない。私の思索生活には一つの習慣がある。問題は自分の滿足するところまで考へぬかねば安んじられないことである。かゝる思索は哲學史のどこかの隅に轉がつてゐるかも知れない。自分の考へてゐることがとんでもない間違ひであるかも知れない。しかしそれは私にとつては第一義の問題ではない。また實際に於て自分の判斷の眞僞は結局自分が決定する外道はないではないか。勿論自分の思索生活の視野を擴大せんがために哲學史の世界にわけ入ることは

私の欲するところであり亦なすべきことでもある。自分の洞察を鋭敏ならしむるために先哲の明智に觸れることは固より私の望むところである。しかし客觀的知識は己の思索生活に同化されるまでは己の學的良心の內容となり得ないものである。なるほど學的作業は人類共同の作業であると見る見解は正しい。だがそれは個人の學的良心を離れて理性の活動が獨立に存在するといふ意味ではない。このことに關しては後日詳細に論ずべき種々なる問題がある。たゞ私は大體次のやうな見解を懷いてゐることを附言するにとゞめる。先づ第一に個人の認識圈內に客觀的眞理が存在し得ると考へる。これは個人を超越したものであるから如何なる個人と雖も彼の正しき認識の及ぶ限りに於てこれを承認せざるを得ざる底のものである。かゝる眞理は二樣の意味に於て存在する。一は客觀的存在——卽ち個人によつて認識せらるゝとせられざるとに拘らず存在するもの——の直觀としてゞある。而してこの直觀は思惟の構成物たる知識の內容として存在するばかりではなく知識より知識に展開しゆく認識の過程に於て舊概念の廢棄と新概念の組織の根據としてその存在を承認せざるを得ざるもので

ある。而も客觀的眞理はかゝる客觀的存在の直觀に於て見出されるばかりではなく思惟の形式に從つて構成された知識そのものとしても亦存在し得るのである。卽ち直觀の內に把握された客觀的存在がそのあるがまゝの性質に從つて構成され而もその構成が思惟活動の必然的形式によつてなされた場合かゝる知識は客觀的眞理でなければならない。第二に、眞理の標識は個人の認識過程に於ける矛盾の自覺に求むる外なしと考へる。故にこれを實際の心理的過程についていへば眞理として認識されたるものが果して客觀的眞理であるか否かはこれを決定することは出來ないのである。もし個人の認識過程が何等矛盾の自覺なく展開してゐるならばそこに成立してくる知識はその個人にとつて悉く眞理として承認される。かゝる眞理の認識を不可能ならしめるものは認識過程に現れてくる矛盾の自覺である。或は知覺の直證からくる矛盾もあらう。或は論理の不統一からくる矛盾もあらう。とにかくかゝる矛盾の自覺のみが眞理ならざるものを眞理から篩分けるのである。第三に、前述の二項の間に見出される矛盾について一言する。第一項に於ては個人の認識圈內に客觀的眞理が存在すると述べ

第二項に於ては個人の認識するところのものが果して客觀的眞理なるか否かの問題は決定する道なしと述べた。しかしながらこれは矛盾せる斷定ではない。客觀的眞理ありと斷じたのは個人及び人類のうちに展開する認識過程の事實がかく斷ずることによつてのみ解釋されるからである。如何なる眞理を以て客觀的眞理となすべきかを絶對的に決定すべき道なしと述べたのは個人の心理生活の實際について述べたのである。客觀的眞理は個人が彼の心理生活に於て現實に眞理として認識するところのものゝうちに存在するのである。たゞそれが何れの知識の何れの部分であるかはこれを認識するところの個人の判斷と常に必ずしも一致するものでないといつたのである。第四に客觀的眞理の確立に至る道は個人の認識過程が互に接觸交渉しつゝ展開することによつて形造つてゆく人類の認識過程のうちに開かれてゐると考へる。個人は個人であると同時に人類の一員である。個人の認識過程には人類に遍在するものと見なければならない超個人的な一面がある。それは先驗論者の探究しつゝある知識構成の形式のみに見出されるのではない。かゝる形式によつて組織された直觀的內容を有て

る知識そのものゝうちにも亦客觀的なるものゝ存在を否定することは出來ない。知識から知識に展開しゆく人類の認識過程に於て常に復歸せざるを得ざる判斷、遂に拒否することの出來ない斷定の如きはこれを客觀的眞理と見るも尙誤なきに庶きものと見る外はない。人類は個人よりもより優れたる認識者である。しかし人類によつて把握された眞理も個人の認識圈內に入つてはじめて現實世界の所有となり得るのである。第五に前項に述べたところのものはこれを一面より見れば結局心理的事實としての認識の相對性を云々したところのものである。こゝに一つの批評がなされるかも知れない。知識相對觀は結局それ自らの相對的なることを認めなければならないから矛盾せる見解であるとの批評である。だがこれは無意味な批評である。一體思索は何等かの判斷を眞理とするところから出發するほか道はない。もし總ての判斷を拒否するならばそこには思索はない。知識相對觀は一つの窮極的立場である。それは知識の絕對性——眞理として個人によつて認識されたる知識の絕對性を承認せざる立場に外ならない。もしこの立場に立つならば既に窮極的立場に立つたことゝなるのである。だが

こゝは未だ議論の場所ではない。ただ私は己の思索生活に自らの問題は自ら滿足するところまで考へぬかうとする習慣を有つてゐることを述べてこの論述を初めようと思ふ。

存在と存在の認識

存在について何事かを語らんとする前に先づ存在の認識が如何にして成立するかを知らねばならぬといふ考へは正しい。何となればかゝる認識の問題を度外視して直に存在の問題を取上げることは認識と存在との一致を無批判に信じて疑はない素朴的實在論の立場に立つてはじめてなし能ふことであるからである。しかし若しも存在の認識の如何にして成立するかを吟味する事が單に認識成立の先天的法則を明にすることにとゞまると見るならば誤である。何故に然るか。そこには三つの理由がある。第一にはかゝる見解を立てたカントが哲學史上の一時期に屬する人物としてその推論の前提に誤があることである。第二には先天的法則を明にすることによつて知識の客觀性の根據を發き得たとする

見解に誤があることである。第三には存在の問題以前に存在の認識の先天的法則の問題があるといふ主張そのものに誤があることである。先づ第一から述べよう。カントは純粋理性批判に於て彼の問題を「如何にして先天的綜合判断は可能であるか」といふ形で提出してゐる。彼がかく問題を提出したのはいふまでもなく彼が(一)判断なるものはある要素の綜合から成立するものであると見(二)更にかゝる判断の必然性はこれを成立せしむる先天的法則に由來するものであると見たために外ならない。だが更に追及しなければならない。何故にカントはかく見たか。それは彼がヒュームの感覺論を受入れたからである。即ち經驗は幾つかの單位的經驗をその要素として成立してゐる。而してそれ等の要素は必然的に何等かの結合を形造るべき性質をそれ自らのうちに有せずとする見解である。經驗が單位的經驗から成立してゐると見たればこそ彼は判断を以てかゝる要素の結合せるものと考へたのである。かゝる單位的經驗それ自らのうちに何等必然的結合の法則を見出し得ずと見たればこそその結合の法則を經驗以前のもの即ち先天的法則に求めたのである。かくてカントの前に提出された「如何に

して認識が成立するか」の問題は或は悟性の範疇と呼ばれ或は思惟の形式と呼ばるゝところのこの先天的法則を明かにすることに限られてしまつたのである。故にこの見解、即ち、認識の問題は認識の形式の問題に限られてゐると見る見解はヒユームの心理學を前提として初めて主張し得るところのものである。若しこの心理學が既に支持し得ざる前時代の遺物であるならば認識の問題は新なる形に於て提出されなければならないのは當然のことである。而も我々は後章經驗の性質について述べるところがあるやうにかゝる心理學は當然廢棄しなければならないものである。次に第二の理由である。即ち、先天的法則を明にすることによつて知識の客觀性の根據を發き得たとする見解に誤があるとは如何なる意味であるかを述べなければならない。知識の客觀性は單にその形式に於て要求せられてゐるのではなくその形式のうちに何等かの內容の盛られたる經驗上の事實としての知識そのものに於て要求せられてゐるのである。なるほど自然科學上の知識の如きは理論から理論に進むに從つていよいよ具體的內容から遠ざかつて抽象的なるものとなつてゆく。しかしそれが如何に抽象的知識となつて

も自然科學的知識と呼び得るものである以上必ず何等かの具體的な經驗上の事實を指示してゐる。例へば「あらゆる出來事はその原因を有す」といふ判斷は一個の抽象的な自然科學上の知識であるがそれは一切の具體的な經驗上の事實から切離された單に一個の判斷として成立してゐるのではなく具體的な經驗上の事實を組織的に認識せしむるところの原理として意味を有するのである。從つてかゝる原理が認識の働に先天的に備つた形式であるといつただけではかゝる原理に從つて構成された自然科學的知識そのものゝ客觀性の根據は明にされてゐない。これを言換ふれば知識の客觀性は單にその形式に於て要求せられてゐるのではなくその形式のうちに何等かの內容の盛られたる經驗上の事實としての知識そのものに於て要求せられてゐるのであるから認識の問題を認識の形式の問題に限る事は誤である。第三の點について述べなければならない。存在の問題以前に存在の認識の先天的法則の問題があるとの見解は何故に誤であるか。既に述べたやうにこの見解は歷史的事實としてヒユームの心理學をその前提としてゐる。而もこの事は何を意味するであらう。ヒユームの心理學を前提とす

ることは卽ち一個の存在觀を前提とすることに外ならないのである。何等必然的結合の法則を有せざる單位的經驗の合成體としての經驗てふ存在觀がその出發點となつてゐるのである。一體如何なる考察であつても何等かの存在から出發しないものはない。假に存在の問題以前に存在の認識の先天的法則の問題があるとの見解を誤なきものとしてもその先天的法則の問題が、提出されることが既に存在を前提としてゐるではないか。卽ちかゝる先天的法則に從つて認識を構成せしむるところの思惟の活動の存在が前提となつて初めてこの問題が提出され得るのである。しかしこれは存在の問題と思惟の形式の問題とを獨立せる二つの問題と見て前者を先にし後者を後にすべしとの意味ではない。思惟の形式の問題から出發せんとするとき常に必ず存在を前提としなければならないやうに存在の問題から出發せんとするとき亦常に必ず思惟の形式を前提としなければならないのである。このことはカントの前提となつたヒユームの心理學についても明である。カントは思惟の形式の問題から出發せんとしたとき既にヒユームの心理學に於ける經驗觀を前提としてゐるがその經驗觀は同時にまた思

惟によつて構成された認識の一片であつたのである。即ちそれは經驗そのものではなく經驗そのものゝ單なる一面からの概念的把握に外ならなかつたのである。要は概念化されたる存在の彼方に横はる存在そのものに考察の出發點を見出し又絶えず考察の據所を求めてゆくことである。而もかゝる存在そのものはしばしば考へられるやうに人間の認識圏外に横はつてゐるものではない。事實は反對である。人間の認識こそかゝる存在の圏内に横はつてゐるのである。それは實在の世界である。而して如何なる意味に於て人間の認識がこの實在の世界に横はつてゐるかゞ今後考察をつゞけようとする問題である。